

ロシアの宗教・社会・文化（1）－正教世界とロシア－

1. はじめに

「正教会」を英語では The Eastern Orthodox Church と言うことがある¹。「東方」Eastern という言葉が付されているのは、カトリックやプロテスタントが西欧で広がったのに対して、正教が中近東、バルカン半島、ロシア等に広がったためである。ここから、「東方正教（会）」という言い方が生まれた。これに対比して、カトリックやプロテスタントを「西方キリスト教」または「西方教会」と言う場合もある。ちなみに、正教会自身は、「東方正教会」という言い方を認めつつも、自らの教会をたんに「正教会」と呼んでいる²。なお、現在、正教を信仰している人々が多数派となって暮らしている地域、または正教文化が強い影響力を持っている地域は、主としてバルカン半島および旧ソ連の一部、すなわちアルメニア、ウクライナ、ギリシア、ジョージア、セルビア、ブルガリア、ベラルーシ、マケドニア、モルドヴァ、ルーマニア、ロシアである。しかし、歴史的には、正教は、バルカン半島および旧ソ連の一部にとどまらず、現在、一般に「イスラム文化圏」、「中東」、「アラブ世界」といった言葉で呼ばれている地域をも含む、より広汎な地域で信仰されていた。ここではまず、キリスト教の歴史とロシアの関係について概観する。

2. 初期キリスト教史（成立から東西教会の分離まで）

紀元前 509 年に古代ローマの共和政が始まったが、前 27 年に帝政へ移行し、ローマ帝国が成立した。その直後の紀元 1 世紀初期に、イエスという人物が、パレスティナのユダヤの地、とりわけガリラヤ周辺で宗教活動をおこなっていた。イエスは、伝統的なユダヤ教の一派であるファリサイ派のあり方を批判し、「神殿から商人を追い出す」などと主張したため、神殿貴族であるサドカイ派により政治犯としてローマ帝国に訴えられ、30 年頃、エルサレムのそばのゴルゴタの丘で、ローマ帝国の法に従って十字架刑に処された。イエスの処刑後、弟子たちがイエスの教えを広め、それはやがてキリスト教と呼ばれるようになった。皮肉なことに、キリスト教は、イエスを処刑したローマ帝国の発展とともに広がっていき、313 年、ローマ帝国は、ついにキリスト教を公認するに至った。キリスト教徒は、当時のローマ帝国内の人口の 10% 程度であったと推定されている。

しかし、最も早くキリスト教を国教と定めたのはローマ帝国ではなく、その東方の外側に位置するアルメニア³であり、それは 301 年頃のことだった。現在もなお、アルメニアでは、「アルメニア使徒教会」（または「アルメニア正教会」とも呼ばれる）が信仰を集めている。そして、最も有名なアルメニア・コニャックの名前にもなっている「アララト（山）」は、現在はトルコ領であるが、アルメニア使徒教会の聖地であり、旧約聖書の物語であるノアの箱舟の流れ着いた場所として信じられている。さらに、350 年頃に、アルメニアの西隣、黒海に面したジョージア⁴がキリスト教を国教としている。現在でもジョージアではジョージア正教会が広く信仰を集めている。また、ローマ帝国の南方の外側、エチオピア北部にあったアクスム王国も 350 年にキリスト教を国教とし、その後のエチオピア正教会⁵に連なっている。このように、アルメニア使徒教会（正教会）、ジョージア正教会、エチオピア正教会など、ビザンツ帝国に隣接する帝国の外部でも、それぞれ独特の発展を遂げていった東方正教会がある。キリスト教が東西に分裂し、宗教改革を経て変貌したカトリックやプロテスタントと異なり、これらの教会は、初期キリスト教の伝統をこんにちまで保持している貴重な文化遺産でもある。そして、その後 392 年

¹ 現在のロシアでは、「正教」または「正教会」と言うとき、「東方」という意味の言葉をつけて言うことは少ないが、あとで見ると、ロシア帝国時代の憲法にあたる「ロシア帝国国家基本法典」には、「東方正教」と訳すことができる用語が用いられている。

² 日本正教会ホームページでは以下のような説明がなされている。「正教会は東方正教会とも呼ばれます。ローマ・カトリック教会やプロテスタント諸教会が西ヨーロッパを中心に広がったのに対し、キリスト教が生まれた中近東を中心に、ギリシャ、東欧から、ロシアへ広がりました」（<http://www.orthodoxjapan.jp/seikyokai.html>）。

³ アルメニアは、キリスト教を国教とすることで、親ローマ、親ビザンツ、反ペルシアの傾向を強めた。キリスト教教義論争については、451 年のカルケドン（第 4 回）公会議に戦乱のため代表を送ることができず、449 年のエフェソス公会議（のち「公会議」の資格を取り消される）の決議である単性論派の立場を受け入れた。エフェソス公会議は、単性論派に好意的な皇帝テオドシウス 2 世の庇護のもとで、アレクサンドリア主教ディオスコロスが単性論を決議した公会議として知られる。しかし、451 年のカルケドン公会議は、エフェソス会議の決議を無効とし、公会議の資格を取り消され、「強奪会議」と呼ばれるようになった。

⁴ ジョージア正教会は、一時期、隣国のアルメニア使徒教会とともに単性論の立場をとったが、7 世紀初頭にカルケドン派に転じている。

⁵ エチオピア正教会は、単性論の立場をとっているとされることもあるが、エチオピア正教会は単性論と見なされることを拒否しており、「単性論教会」を自称していない。451 年のカルケドン（第 4 回）公会議を承認しないことで分離した教会であるため、より中立的な呼称として「非カルケドン派」が用いられる。同じ「非カルケドン派」に属するアルメニア使徒教会、シリア正教会、コプト正教会とはフル・コミュニオン（完全相互領聖）の関係にある。

に、ようやくローマ帝国がキリスト教を国教としている。

実は、この間の 330 年に、ローマ帝国は、コンスタンティノープル（現在のイスタンブール）に遷都している。当時のユーラシア大陸の文明の中心は、現在の私たち（とりわけ、現在の欧米諸国の人々）が考えるよりもずっと東方にあり、ローマ帝国の首都がコンスタンティノープルに移動したことは、帝国の繁栄が東方諸国との関係なくしてはあり得なかったということを意味していよう。地中海世界の東方、現在のトルコの北方の黒海とカスピ海に挟まれたコーカサス山脈南麓にあるアルメニアやジョージアがいち早くキリスト教を国教としたのも、こうした事情が背景にあったからである。ところで、現在の歴史学では、このコンスタンティノープル遷都以降のローマ帝国を、ビザンツ帝国または東ローマ帝国と呼んでいるが、当時の帝国が「ビザンツ帝国」とか「東ローマ帝国」と自称するようになったわけではない。

さて、初期キリスト教の歴史を見ると、「公会議」が重要とされる。「公会議」とは、全世界の教会から司教（主教）等の正規代表者が集まり、教義・典礼・教会法などについて審議決定する最高会議とされる。それぞれの公会議は、開催地の名前を伴って呼ばれる。正教会は 787 年の第 2 ニカイア公会議（第 7 回公会議）までを普遍的公会議と認め、第 7 回までの公会議を「全地公会」または「全地公会議」と呼んでいる。以下、第 7 回公会議までの流れを概観しておこう。

第 1 回公会議は、325 年、ニカイアで開かれた。このニカイア（第 1 回）公会議では、「三位一体」を形成する、「父なる神」、「子なるキリスト」、「聖霊」の三者の関係について、「父と子の同一実体」説、「聖霊は父から発する」との解釈（「ニカイア信条」）が提起された。ここで議論された「三位一体」の三者の関係は、その後のキリスト教の教義において最も重要であり、それゆえあまたの論争を呼び、キリスト教の東西分裂の遠因ともなった。

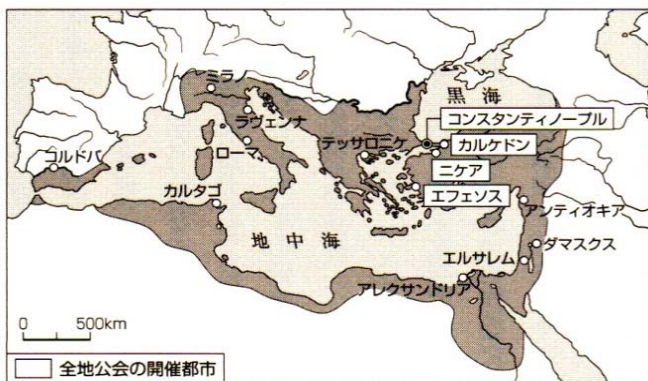
381 年に開かれたコンスタンティノープル（第 2 回）公会議は、「三位一体」についての前回のニカイア（第 1 回）公会議の解釈を確認し、「子」の従属性を主張するアリウス派を異端とした。このコンスタンティノープル（第 2 回）公会議の例のように、公会議では教義の正統を守り、そこから外れた考え方をしばしば「異端」として退けている。

次いで 431 年に開かれたエフェソス（第 3 回）公会議では、「信条」の改変が禁じられている。この頃、教会制度が確立されたが、使徒ペテロが殉教したローマの教会、次いで首都コンスタンティノープルの教会が高い地位を占めた。

さらに、451 年に開かれたカルケドン（第 4 回）公会議は、キリストにおける「神性」と「人性」の関係を「混合・変化・分割・分離しない」とする「カルケドン信条」を作成し、キリストは単一の性を持つとする単性論⁶、またキリストの性は一つではなく神性と人性との二つの性に分離されるとして人性においてキリストを生んだマリアを神の母（テオトコス）であることを否定するネストリウス派⁷を、それぞれ異端とした。

それから 100 年あまりのちの 553 年に開かれたコンスタンティノープル（第 5 回）公会議は、3 人の神学者の教説（「三章」と言う）の弾劾が決議され、カルケドン（第 4 回）公会議の決定が再確認された。

さらに、それから 130 年近く後の 680 年に開かれたコンスタンティノープル（第 6 回）公会議では、キリスト単意論を異端と宣告し 4 人のコンスタンティノープル総主教とローマ教皇ホノリウスが異端として断罪された。



現在のイスタンブール（旧コンスタンティノープル）

⁶ シリア正教会（ヤコブ派）、アルメニア使徒教会、コプト正教会（エジプトのアレクサンドリア総主教を頂点とする）、エチオピア正教会が、外部からは単性論派とされている。

⁷ シルクロードを経て中国に伝えられ、「景教」と呼ばれたのはネストリウス派である。

ところで、当時のキリスト教徒の間では、イコン（聖像画）が崇敬されていたが、730 年にシリア出身の東ローマ皇帝レオン 3 世は、旧約聖書のモーセの十戒の「偶像禁止」を根拠にイコン崇敬を禁じる勅令（聖像禁止令）を発令した。この聖像禁止令は、ビザンツ帝国の小アジア側や一部の聖職者・知識人には支持されたが、ヘレニズム文化（古代ギリシア文化）の伝統の残る首都コンスタンティノープルや帝国の西欧側の国民、イコンの製作に携わっていた修道士達の反発を招いた。聖像をゲルマン人への布教に用いていたローマ教会も、この決定を非難し、コンスタンティノープルへの税の支払いを停止し、これにより既に 4 世紀から文化的・政治的に亀裂が生じつつあった東ローマ皇帝・コンスタンティノポリス総主教とローマ教皇の関係が決定的に悪化した。実際、395 年に、ミラノを首都とする西ローマ帝国が成立し、一時期、ローマ帝国が東西に分裂した。ここで、「一時期」というのは、この西ローマ帝国は 476 年までしか存続できず、550 年頃までには、ユスティニアヌス帝が地中海世界を再統一したからである。

こうした状況を背景に 787 年に開かれたニカイア（第 7 回）公会議は、レオン 3 世の孫のレオン 4 世の皇后エイレーネー（アテネ出身）が主宰し、イコン崇敬の正統性を再確認したが、もはや東西の亀裂は修復できなかった。というのは、800 年に、ローマ教皇レオ 3 世が、フランク王国カール大帝（シャルルマーニュ）に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言したからである。他方、コンスタンティノープルでは、858 年に、聖職者の経験のない学者・官僚であったフォティオスが、コンスタンティノープル総主教に就任し、事態は混迷の度を増した。かくして、863 年、ローマ教皇は、フォティオスを破門（ローマ教会では「離教」と言う）し、教会の東西対立は決定的なものとなった。この背景には、ローマを中心とする西方教会では、三位一体のうちの「聖霊」が「子からも」（フィリオクエ）発出するとの考えが強かったのに対して、コンスタンティノープル総主教が、「信条」の改変を禁じた 431 年のエフェソス（第 3 回）公会議の規程に基づきこれを強く否定したことがあった。

そして、ついに 1054 年 7 月 16 日、ローマ教皇の使節としてコンスタンティノープルを訪問した枢機卿フンベルトゥスは、「信条」からの「フィリオクエ」の削除⁸、聖職者の妻帯の慣行等を根拠に、首都コンスタンティノープルの聖ソフィア教会に、コンスタンティノープル総主教ケラリオスの破門を提出した。これに対して、ケラリオスは、逆に教皇の使節を破門し、ついに東西両教会が分離するに至った。その後、コンスタンティノープルは、台頭するオスマン帝国の脅威の前に弱体化し、1453 年、最終的にコンスタンティノープルがオスマン帝国軍の攻撃によって陥落し、ローマ帝国は崩壊することになる。

3. ロシアにおけるキリスト教の受容と発展

9 世紀から 10 世紀にかけて、ビザンツ帝国の弱体化、バルカン半島やロシアなどスラヴ人の居住する地域での諸民族の国家の台頭とともに、東方正教会は、スラヴ系諸民族の国家宗教ないし民族宗教として「土着化」の歴史を歩んでいくことになる。

早くから正教を信仰していたギリシア人、アルメニア人、ジョージア人のほか、この時期に正教を受け入れたのは、東スラヴ族（現在のロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人）、南スラヴ族（ブルガリア人、セルビア人、マケドニア人）、その他の諸民族としてルーマニア人（現在のモルドヴァ人を含む）らであった。なお、バルカン半島の北方に居住する西スラヴ族（現在のポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、クロアチア人、スロヴェニア人）およびハンガリー人（マジャール人）は初期の段階で正教の影響を受けているが、やがて西欧のフランク王国との関係を重視して、カトリックを受け入れていった。南スラヴ族は、ビザンツ帝国の崩壊後、オスマン帝国の支配下で、正教の信仰を守っていくことになる。他方、9 世紀以降、東スラヴ族の中でも、ルーシ人（のちのロシア人）が台頭、13～14 世紀のモンゴルの支配を経て、ロシア帝国が成立、ビザンツ帝国の後裔を唱えることとなる。

以下、ここでは、ルーシ台頭からロシア帝国の成立までを少し詳しく見てみよう。

5 世紀以降、スロヴァキア付近のスラヴ族の一部が東に移動し、東スラヴ族（のちのロシア人・ウクライナ人・ベラルーシ人）が形成された。9 世紀末、東スラヴ族の国、ルーシが歴史に登場する。ルーシは、スカンジナビア半島・バルト海と黒海・ビザンツ帝国とを結ぶノルマン人の交易・通商ルートに位置していた。この交易・通商ルートは、北から、バルト海→ネヴァ川→ラドガ湖→ヴォルホフ川→陸路→ドニエプル川→黒海というルートで、ヴォルホフ川上流からドニエプル川上流までのあいだに、比較的平坦で短い陸路があるだけで、あとは水

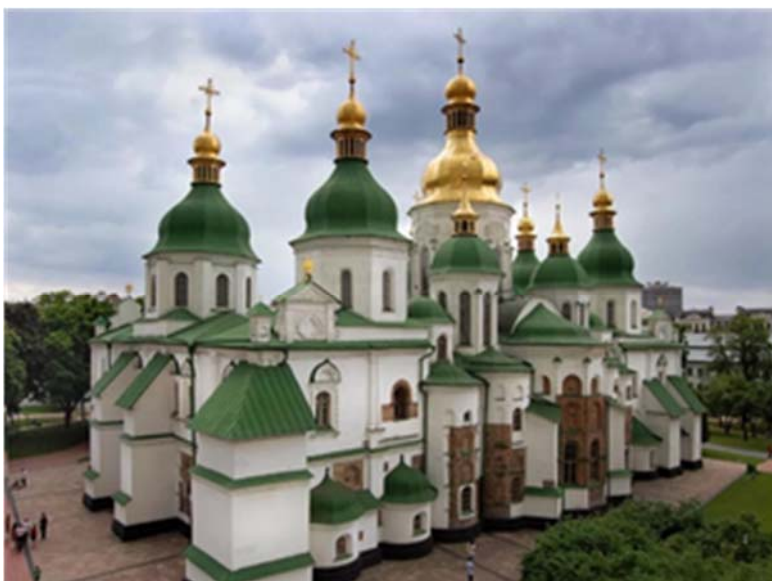
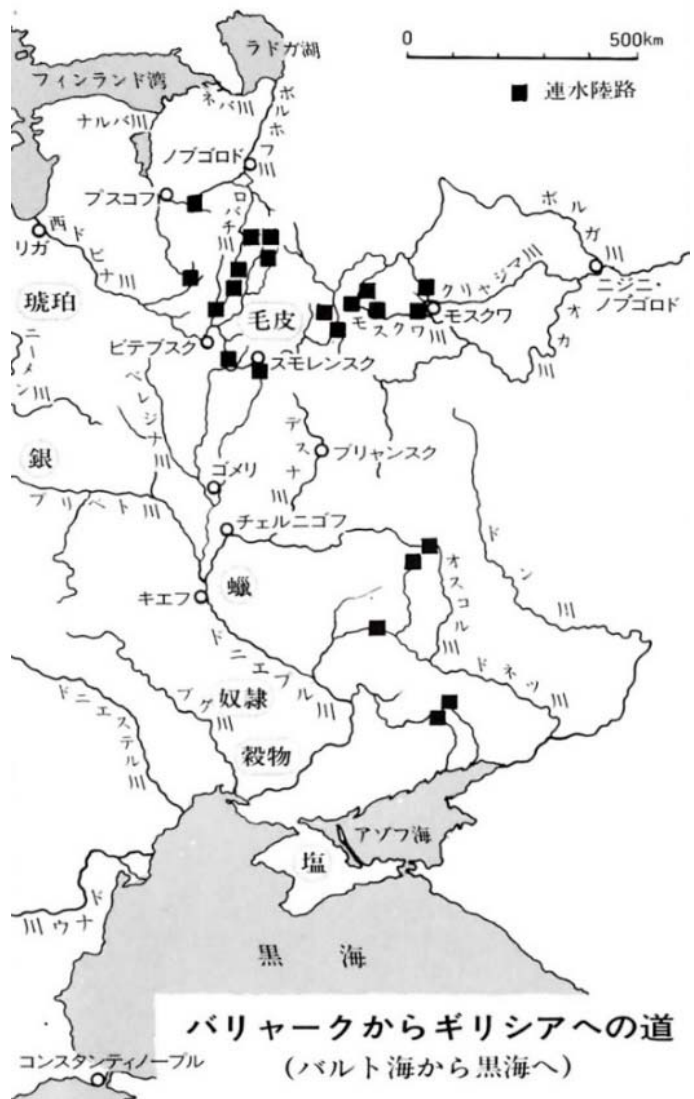
⁸ これはカルケドン信条に対する誤解に基づいている。

運のルートである。このルート上のヴォルホフ川中流にノヴゴロド、ドニエプル川中流にキエフというルーシの二大都市が建設された。

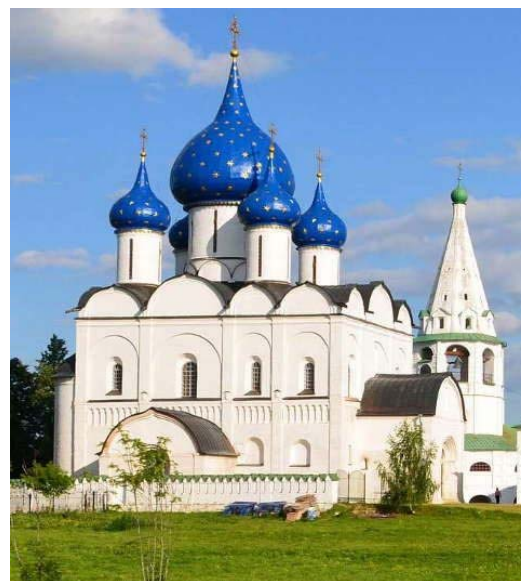
『原初年代記』⁹によると、ルーシの人々がノルマン人（ルーシではヴァリャーク人と呼んだ）に対して「ルーシは広大で豊かだが争いが絶えないので、ここに来て統治してほしい」と要請し、ノルマン人のリュリク（在位 862-879 年）がノヴゴロドに王朝を創建したとされるので、ルーシの最初の王朝はリュリク朝と呼ばれる。2 代目の王、オレク將軍（在位 879-912 年）がキエフを攻略し、キエフ・ルーシ（キエフ公国）の歴史が始まったとされる。キエフ・ルーシがキリスト教を国教としたのは、988 年、キエフ・ルーシのヴラジーミル大公（ヴラジーミル 1 世、在位 980-1015 年）が、キリスト教の洗礼を受け、ビザンツ帝国皇帝バシレイオス 2 世の妹アンナを妻としたことによるとされている。

その後、11 世紀前半にはスラヴ語典礼が導入され、11 世紀中頃には、キエフ洞窟修道院が創建されている。しかし、1223 年、モンゴル軍がルーシ南部に侵入し（その後、撤退）、さらに 1237 年には、モンゴル軍がルーシ東部から侵入し、ルーシ人の居住地の東部から南部にかけての大部分はモンゴル（キプチャク・ハン国）によって支配されることになった。この間、モンゴル軍に対抗したキエフは荒廃し、逆にモンゴルの支配下でキリスト教の信仰を維持することになったモスクワ公国が力を蓄えていた。こうした事情を背景に、ルーシ人のキリスト教信仰

の中心であったキエフ府主教座が 1310 年にモスクワに移転している。そして、ついに 1380 年、モスクワ公国軍がクリコヴォの戦いでキプチャク・ハン国軍に大勝すると、モスクワは発展の足がかりを築くことになった。



ソフィア大聖堂（キエフ、1037 年）



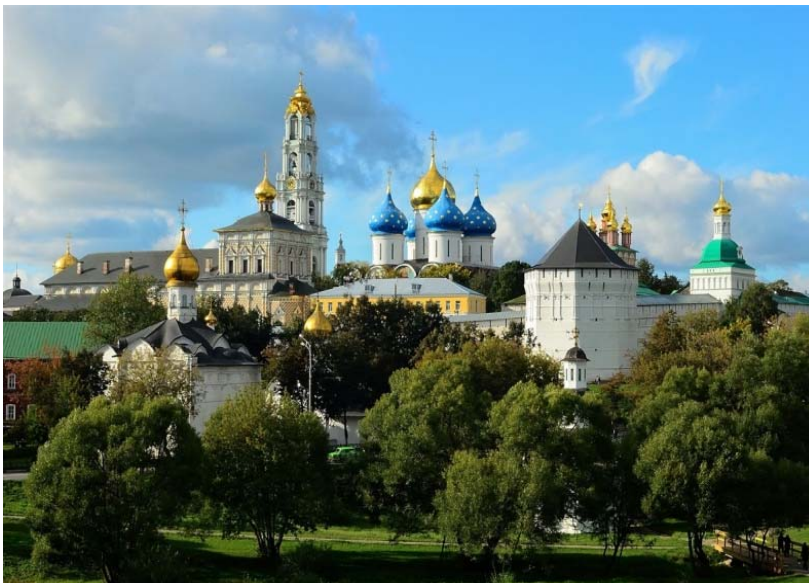
至聖生神女生誕教会（スーズダリ、1222 年）

⁹『原初年代記』は、『過ぎし年月の物語』とも言い、およそ 850 年から 1110 年までのキエフ・ルーシの歴史について記された年代記であり、初版は 1113 年に編纂されている。

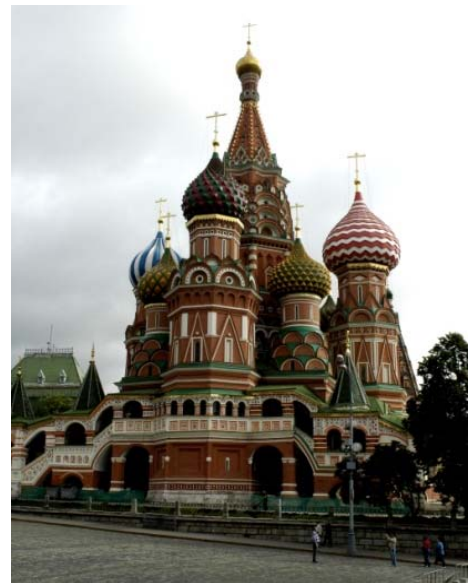
折しも 1439 年、オスマン帝国の攻撃にさらされたビザンツ帝国がローマに支援を求めると、ローマは東方教会の服従を求め、フィレンツェ公会議で東西教会の合同が決定されたが、東方教会の多くはこれに反発し、モスクワのイヴァン 3 世（在位 1462-1505 年）もこれに反発し、ギリシアから送られた府主教を合同に賛成しているとして廃して、モスクワ総主教の独立を達成した。

1453 年のローマ帝国の崩壊を受けて、1472 年、ローマ教会はイヴァン 3 世を懐柔するため、ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス 11 世の姪ゾエ（ソフィア）をイヴァン 3 世に嫁入りさせたが、これは、かえってイヴァン 3 世にこの結婚によりビザンツ帝国の正当な後継者を名乗る口実を与えることとなり、イヴァン 3 世は自ら「ツァーリ」（ビザンツ帝国皇帝の称号カエサル¹⁰のロシア語）と称し、ビザンツ帝国の双頭の鷲¹⁰の紋章をモスクワ公国の国章として採用し、モスクワは「第三のローマ」¹¹を自称するようになったのである。

しかし、1598 年、イヴァン 4 世の息子フョードルの死によって、リューリク朝は断絶してしまう。そして、動乱（スムータ）の時代（1604-13 年）を経て、1613 年、貴族会議でロマノフ家からツァーリが選出され、ロマノフ朝が始まる。その少しのちの 1652 年、モスクワ総主教に選出されたニーコンは、教会典礼の改革に着手したが、それはかえって民衆の反発を呼び、新しい儀礼を拒否した分離派が登場し、教会は分裂して弱体化し、教会の政権への従属が強まった。その後、ロシア帝国は、ピョートル 1 世（大帝。在位 1682-1725 年）、エカチェリーナ 2 世（在位 1762-96 年）の時代に大いに発展し、ロシアにおけるキリスト教会、すなわちロシア正教会も、国家に従属するかたちで、国教として発展していった。ロシア帝国は、陸海軍の各部隊・各艦には軍司祭を、在外公館にも公館付き司祭を派遣するなどして、ロシア国家とロシア正教会は一心同体となっていた。



至聖三者聖セルギイ大修道院（セルギエフ・パサート、1337 年）



至聖生神女庇護教会（モスクワ、1560 年）

4. 近代ロシア国家における政教分離と信仰の自由

ロシア帝国の発展と共に国教としてのロシア正教も発展したが、他方で、ロシア帝国の領土の拡大は、西方ではカトリック信仰が支配的なポーランドやリトアニア、東方および南方ではイスラム教の信仰が支配的なヴォルガ川中流域、カフカース地方、中央アジアなどを帝国領内に含むことになり、宗教的な軋轢も招くことになった。かくして 1906 年、ロシア帝国の絶対王制から立憲君主制への移行、国民によって選出される議会の開設などを定めた「ロシア帝国国家基本法典」は、信仰の自由を保障することになった。とはいえ、「ロシア帝国国家基本法典」は、正教が「首座を占め」「支配的」とであると定めており、ロシア正教の特権的地位は維持された。

1917 年 11 月、ボリシェヴィキ（のちのソ連共産党）政権が成立すると、急進的な反宗教活動が活発化し、建造物としての教会の破壊や倉庫への転用などが横行することになった。こうした活動は、1918 年の憲法¹²で「反

¹⁰ 現在のロシア連邦の国章も、このときの「双頭の鷲」に基づくものである。

¹¹ この場合、コンスタンティノープルが「第二のローマ」である。

¹² ソ連期の憲法、すなわち 1918 年の「ロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国憲法（基本法）」、1936 年の「ソヴィエト社会主義共和国連邦憲法（基本法）」、1977 年の「ソヴィエト社会主義共和国連邦憲法」の翻訳については、ノーボスチ通信社編、稲子恒夫訳『新ソ連憲法・資料集』ありえす書房、1978 年を参照。なお、同書に訳載されている 1924 年 1 月 31 日採択の「ソヴィエト社会主義共和国連邦基本法（憲法）」はソ連結成に際し、ソ連の連邦制度および連邦国家機関等について定めたものであるため、通常の憲法と異

宗教的宣伝を行う自由」が認められたことが法的根拠となっていた。しかし、正教会や信仰に対する抑圧は、長くは続かなかった。1936 年の憲法にも「反宗教的宣伝を行う自由」の規定は維持されたが、ドイツのファシズムや日本の軍国主義が台頭し、戦争の危機が迫っていた当時、ソ連政権は、むしろ愛国主義を鼓舞する必要性から、ロシア正教会に協力を求め、民衆の信仰にも寛容にならざるを得なかったからである。そのため、ソ連では公的には「反宗教的宣伝を行う自由」が喧伝されていたものの、個人の私生活においては、ロシア正教への信仰が許されていた¹³。こうした風潮に「反宗教的宣伝を行う自由」の規定は合致せず、1977 年の憲法では「無神論の宣伝を行う権利」に置き換えられている。

現行の 1993 年のロシア連邦憲法では、ソ連時代の「反宗教的宣伝」または「無神論」といった文言はなくなり、「いかなる宗教も信仰しない権利を含む信仰の自由」という表現に変化している。

他方、1936 年のソ連憲法には、「信仰と結びつく敵意または憎悪を呼び起こすことは禁止される」との規定が、また現行のロシア連邦憲法には、「社会的、人種的、民族的、宗教的な憎悪および敵意を起こさせる宣伝または扇動は許されない。社会的、人種的、民族的、宗教的、言語的な優越性の宣伝は禁止される」といった規定がある。

「ロシア帝国国家基本法典」(1906 年 4 月 23 日公布)

第 62 条 ロシア帝国において首座を占める支配的な信仰は東方正教である。

第 63 条 皇帝は、ロシア皇位の所有者として、正教以外のいかなる信仰も持ってはならない (第 62 条)。

第 64 条 皇帝は、正教を信仰する君主として、支配的信仰の教義の最高の守護者であり擁護者であるとともに、正教信仰の番人である。

第 65 条 専制権力は、教会の管理においては、聖宗務院およびそれにより設置されている監督機関によって行使される。

第 66 条 (イ) 生来より、(ロ) 国籍取得により、ならびに (ハ) ロシアで勤務するか、またはロシアに一時的に滞在している外国人であることにより、支配的な教会に所属していないすべての者は、いずれの場所においても、その信仰およびその儀礼に従った礼拝の自由な行使を享受する。

第 67 条 信仰の自由は、(ア) 外国のキリスト教徒に対してだけでなく、ユダヤ教徒、イスラム教徒、異教徒に対しても、(イ) ロシアの専制の統治を祝福し、帝国の力のますますの平穏と強まらんことを宇宙の造物主に願いつつ、その祖先の法と信仰に従ってさまざまな言語によって全能の神を敬う、ロシアに居住するすべての人民に対しても、授けられる。

第 68 条 ロシア帝国における外国のキリスト教徒および異教徒の問題は、皇帝により定められた宗務局および特別の閣僚の管轄下に置かれる。

「ロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国憲法 (基本法)」(1918 年 7 月 10 日採択)

第 13 条 良心の実質的な自由を勤労者に保障するため、教会は国家から分離され、学校は教会から分離され、宗教的宣伝および反宗教的宣伝を行う自由が全国民に認められる。

「ソヴィエト社会主義共和国連邦憲法 (基本法)」(1936 年 12 月 5 日採択)

第 124 条 良心の自由を国民に保障するため、ソ連においては、教会は国家から分離され、学校は教会から分離される。宗教的な礼拝を行う自由および反宗教的宣伝を行う自由がすべての国民に対して認められる。

「ソヴィエト社会主義共和国連邦憲法」(1977 年 10 月 7 日採択)

第 52 条 ①ソ連国民は、良心の自由、すなわち任意の宗教を信仰し、またはいかなる宗教も信仰せず、宗教的礼拝を行い、または無神論の宣伝を行う権利が保障される。信仰と結びつく敵意または憎悪を呼び起こすことは禁止される。

②ソ連における教会は国家から分離され、学校は教会から分離される。

なり、国民の人権およびその他の諸権利並びに義務等についての規定はないため、ここでは扱わない。また、現行の 1993 年の「ロシア連邦憲法」の翻訳については、初宿正典・辻村みよ子編『新解説世界憲法集 第 3 版』三省堂、2014 年を参照。

¹³ そのことは、例えば、ソ連期に生まれた人物の名前にも、キリスト教 (ロシア正教) 由来の名前が散見されることから明らかである。例えば、ソ連時代のありふれた男性名であるニコライはサンタクロースの起源ともされるキリスト教の聖人ニコラ (ス) のロシア語であり、ブーチン大統領の名でもあるヴラジーミルはロシアにキリスト教を導入したヴラジーミル大公 (聖ヴラジーミル) に由来する。また、マリア、その母の名アンナ、聖カタリナのロシア語名であるエカチェリーナ、ラテン語のクリスマス (natale) に由来するナターリア、第二代キエフ大公妃の聖オリガに由来するオリガ、聖オリガの洗礼名であるエレナなどは、昔も今も、ロシアではポピュラーな女性名である。

「ロシア連邦憲法」(1993 年 12 月 12 日採択)

第 28 条 各人に、良心の自由、個人としてもしくは他者ととともに任意の宗教を信仰する権利、もしくはいかなる宗教も信仰しない権利を含む信仰の自由、ならびに宗教的およびその他の信条を、自由に、選択し、持ち、宣伝し、それに従って行動することが保障される。

第 29 条 ②社会的、人種的、民族的、宗教的な憎悪および敵意を起こさせる宣伝または扇動は許されない。社会的、人種的、民族的、宗教的、言語的な優越性の宣伝は禁止される。

5. 現代ロシア社会と宗教

ソ連解体後は、政権による無神論の喧伝もなくなり、ロシア正教が復興し、建造物としての教会の再建・修復が活発化しただけでなく、降誕祭(クリスマス)や復活大祭(イースター)などの正教会の大祭などが、商業主義とも結びつきながら盛んになり、大統領がクリスマス・ミサなどの宗教行事に参加したり、逆に大統領教書演説の場に宗教界の指導者が招かれるなどのこともあたりまえのことになっている。

かくして、現代のロシアが多民族・多文化・多言語の連邦制国家であるとしても、ロシア語を母語とし、主としてロシア正教を信仰するロシア人¹⁴が人口の約 80%を占めていること¹⁵、また、例えば 2012 年 9 月にロシアで行われた宗教に関する世論調査で、ロシア正教を信仰する者 79%、イスラム教を信仰する者 6%、カトリック、ユダヤ教を信仰する者各 1%、プロテスタントや仏教などの信仰はいずれも 1%未満となっていることから¹⁶、ロシアでは、依然としてロシア正教が、社会、文化、そしてときに政治にも大きな影響を与えている。

政治への影響の例としては、例えば、2013 年に、ロシア正教が「罪」とし、イスラム教も禁じている同性愛について、これを肯定的に扱うことを禁ずる法律を議会がほぼ全会一致で採択したことが挙げられよう¹⁷。

また、ロシアのパンクバンドの「プッシー・ライオット」のメンバーおよび協力者が、ロシア大統領選挙¹⁸を目前に控えた 2012 年 2 月 21 日、ロシア正教会モスクワ総主教直轄の首座聖堂であるモスクワの救世主ハリストス大聖堂に無断侵入し、その祭壇で、総主教とプーチンを批判し、聖母マリアを貶める内容の歌詞を歌いながらバンド演奏を行ったことが、フリーガン行為にあたるとされ、5 名の関与者のうち 3 名(2 名は国外逃亡)が逮捕・起訴された事件もロシア社会とロシア正教の関係を考える上で興味深い。

この救世主ハリストス大聖堂の祭壇でのプッシー・ライオットによる演奏・歌唱と、警備員による拘束の場面は、動画撮影され、プーチン批判のロックバンドが逮捕された瞬間として、SNS を通じて世界中に拡散された。そのため、彼女たちの逮捕は、反プーチン派を弾圧し、言論の自由を抑圧するものとして、欧米諸国で、ロシア政府を批判する世論を巻き起こした。



ロシアのパンクバンド「プッシー・ライオット」

¹⁴ ここでいう「ロシア人」は、エスニックグループとしてのロシア人、すなわちロシア語の「ルースキー (русский)」を意味する。他方、ロシア国籍を持つ人々の集団、すなわちロシア国民のことはロシア語で「ラシヤーニン (россиянин)」と言う。ロシアは、多民族国家であるため、この「ルースキー」と「ラシヤーニン」は、厳密に区別されなければならない。なお、日本語の「ロシア語」はロシア語では「ルースキー・イズィーク (русский язык)」(イズィークは「語」にあたる)、「ロシア文化」は「ルースカイ・クリトゥーラ (русская культура)」であるが、国名としての「ロシア」は「ラシヤー (Россия)」、「ロシア連邦 (Российская Федерация)」は「ラシースカイ・フェデラーツィー」である。

¹⁵ ロシア連邦の 2010 年の国勢調査時の所属民族調査によると、全人口 1 億 4,285 万 6,536 人のうち、エスニックグループとしてのロシア人は 1 億 1,101 万 6,896 人 (77.71%) であるが、調査時に「民族」について無回答であった者が 562 万 9,429 人いるので、それを除いた「所属民族」を回答した者のうちロシア人と回答した者の比率は 80.90%である(「連邦国家統計庁ホームページ」の統計データ http://www.gks.ru/free_doc/new_site/population/demo/per-itog/tab5.xls を参照)。

¹⁶ レヴァダセンターによる調査 (<https://www.levada.ru/2012/10/11/rossiyane-o-religii-i-tserkvi/>)。

¹⁷ 2013 年 6 月 29 日付「『子どもの健康および発達を損なう原因となる情報から子どもを保護することについての連邦法』第 5 条ならびに家族の伝統的価値観の否定を宣伝する情報から子どもを保護することを目的とするロシア連邦の個々の法令の修正についての連邦法」、いわゆる「同性愛宣伝禁止法」のこと。同法の 2013 年 6 月 11 日の下院での採決は、賛成 436、反対 0、棄権 1、欠席 13 であった(ロシア連邦下院ホームページ <http://vote.duma.gov.ru/vote/81454>)。

¹⁸ 大統領選挙の投票日は 2012 年 3 月 18 日で、選挙戦では、プーチン首相(当時)が勝利し、自身 3 期目の大統領に選出された。

他方、一審判決を前にした 2012 年 7 月 20～23 日にロシア国内で行われた世論調査で、「プッシー・ライオット」に対する刑事訴追の理由を尋ねたところ、この事件について聞いたことがあると答えた 79%の回答者のうち、42%が「教会と信者を侮辱したから」、29%が「たんにフリーガン行為をし、社会秩序を乱したから」と答え、「プーチン辞めろと言ったから」と答えた回答者は 17%に過ぎなかった。また「プッシー・ライオットの狙い」を尋ねたところ、23%が「教会と信者に対する批判」、20%が「教会の政治への関与に対する批判」と答え、「プーチン批判」と答えた回答者は 19%に過ぎなかった¹⁹。また、一審判決の直前の 8 月 10～13 日にロシア国内で行われた世論調査では、回答者の 44%が裁判は「公正・客観的・公平」に行われたと回答し、判決が「上からの指示」によるものだと言った者は 18%であった²⁰。

結局、8 月 17 日の一審判決は、被告全員に禁錮 2 年の実刑判決を下し、同年 10 月 10 日の控訴審判決も、2 名については一審判決を維持し、1 名だけは執行猶予付き禁錮 2 年で釈放された。

この事件に関する欧米の報道は、ロシア正教やプッシー・ライオットの楽曲の歌詞に対する理解不足²¹から、反プーチン派の弾圧あるいは言論の自由の抑圧として過度に政治的に扱われた。他方、ロシア国内では、世論調査を見る限り、大半の人々が、プッシー・ライオットの活動を教会や信者を侮辱するものと見ていたことがわかる。なお、プッシー・ライオットは、2018 FIFA ワールドカップ・ロシア大会のフランス対クロアチアの決勝戦の開始直後に警察官に扮してピッチに乱入している。パンクが、既存の常識や権威に挑戦することであるとすれば、プッシー・ライオットは、文字通りパンクバンドたることを行動で示し、思惑どおり国際的な知名度を上げることに成功したが、他方、売名と利己的なビジネスのために、正教の信者やワールドカップ決勝戦に臨むサッカー選手やサポーターの気持ちを逆撫でたことは批判されることになるだろう。

参考文献

- 廣岡正久『宗教の世界史 10 キリスト教の歴史 3 東方正教会・東方諸教会』（山川出版社 2013）
森安達也『＜ビジュアル版＞世界の歴史 9 ビザンツとロシア・東欧』（講談社 1985）

文献紹介

- エフドキーモフ、パーウェル（古谷功訳）『ロシア思想におけるキリスト』（あかし書房 1983）
クレマン、オリヴィエ（冷牟田修二・白石治朗訳）『東方正教会』（白水社 1977）
黒川知文『ロシア・キリスト教史：土着と服従と復活』（教文館 1999）
ゴルジェンコ、N.S.（宮本延治訳）『現代ロシア正教』（恒文社 1990）
白石治朗『ロシアの神々と民間信仰ーロシア宗教社会史序説』（彩流社 1997）
ゼルノーフ、N.（宮本憲訳）『ロシア正教会の歴史』（日本基督教団出版局 1991）
高橋保行『迫害下のロシア教会ー無神論国家における正教の 70 年』（教文館 1996）
高橋保行『ロシア精神の源ーよみがえる〈聖なるロシア〉』（中公新書 1989）
ニコルスキー、N.M.（宮本延治訳）『ロシア教会史』（恒文社 1990）
濱本真実『共生のイスラーム：ロシアの正教徒とムスリム』（山川出版社 2011）
廣岡正久『ソヴィエト政治と宗教ー呪縛された社会主義』（未来社 1988）
廣岡正久『ロシア正教の千年ー聖と俗のはざま』（NHKブックス 日本放送出版協会 1993）
御子柴道夫『ロシア宗教思想史』（成文社 2003）
森安達也『東方キリスト教の世界』（山川出版社 1991）

¹⁹ <https://www.levada.ru/2012/07/31/rossiyane-o-dele-pussy-riot/>

²⁰ <https://www.kommersant.ru/doc-y/2002817>

²¹ 「マリア様、プーチンをクビにして」、「マリア様、フェミニストになって」、「総主教はプーチンを信じてる。神よりましだというなら雌犬を信じろ」といった歌詞は、プーチン批判もさることながら、むしろ聖母マリアを貶め、総主教を批判するものと聞こえる。しかも、正教の信者にとって最も許しがたかったのは、こうした歌詞を含む楽曲が教会の祭壇で演奏され歌われたことである。なぜなら、正教は、教会内でのいっさいの楽器の演奏を厳しく禁じているからである。したがって、賛美歌は、教会では、楽器の伴奏なしで歌われてきた。